
今年もその日がやって来た！

針苑子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今年もその日がやつて來た！

【Zコード】

Z0643K

【作者名】

針苑子

【あらすじ】

バレンタインデーのお話です。

今年もダントン1位であつたであるつあの御方。

当然のようごと、そのチョコを食べさせられるラエスリールと、保護者会の面々のお話です。

(前書き)

甘い物が苦手なラエスリール。

今年も嫌々な「あの日」がやってきました..。

毎年毎年、何の嫌がらせかとラエスリールは頭を抱えていた。

テーブルの上には綺麗にラッピングされたたくさんの箱が、山と積まれている。

「はあ……」

ため息ついて、渋々とその一つに手を伸ばした。

「あら～、ラスったら。全つ然、減つてないじゃないの～」

砂色の髪をした3才年上の捕縛師が、にこやかに声をかけてきた。

他人の不幸は蜜の味。

毎度のことながら、サティーンは実に嬉しそうだった。

「代わりに食べてられないか、サティーン」

言うだけ無駄と知りつつも、ラスは縋るような目つきになった。

「だめよ、そんなの。私が闇主に怒られちゃうわ」「私が甘い物を苦手なの、知ってるだろ？」

「よく知ってるけど、それが何か？」

「……」

くすくす笑うその顔は、可愛い妹分の苦行を楽しんでいるようだった。

何とも人が悪い。

毎年のことなので、ラエスリールは諦めて、手直にあつた箱を一つ手に取つた。赤いハート模様の包装紙を丁寧に剥がす。

蓋を開けると、甘い匂いが広がった。

意を決して、一つを摘み上げて口に入れた。

「……」

想像以上に甘い。

やつぱり苦手だ。

「大体、何で私が食べなきゃならないんだ？ これ、ほとんど闇主

宛てなのに…」

小さな一個をようやく飲み込んで、ラエスリーは次の
一個を摘んでは、ため息をついた。

「だつて、闇主の物はラスの物でしょ？　いい加減、拗ねてないで、
食べちゃいなさいな」

「拗ねる？　私が？」

「あら、違うの？」

「何で私が拗ねなきゃいけないんだ？」

ラエスリーの相変わらずな反応に、サティンはくすりと笑つて答
えた。

「自分の男がモテ過ぎるから、拗ねてるんでしょ？　ラスは」

「……？」

自分の男？

それって誰のことだ？

誰が誰の男なんだ？

それって、今この目の前にある……の山と、何か関係があるのか？

ラエスリーは、心底わからない、といった顔でサティンの薫色の
瞳を見つめた。

そして。

「……えつ。それって…えええつ？！」

数瞬の間に後に、盛大にむせたのだつた。

「サ、サティン！」

「何かしら？　ほほほ」

真っ赤になつて抗議しようとして、ラエスリーはまたむせた。

「あらあら…。大丈夫ですか？」

ほつそりとした白い手が横合いから現れ、テーブルに紅茶のカップ
を置いた。

「あ、彩糸。…すまない」

優しく背中をさする手に、ラエスリールは徐々に落ち着いていった。

「姉ちゃん！ 今年の分、届いてるんだって？ 僕のは？！」

勢いよくドアが開くと同時に、騒がしい声が降ってきた。

「お行儀が悪いですよ、若様」

彩糸が注意すると、ちらりと舌を出す。

乳白色の柔らかい髪が揺れる。

悪戯好きの子供のような人懐っこい藤色の瞳は、吸い込まれそうなくらい、深く澄んでいる。

「お生憎様。そんなの、あるわけないでしょ？」

一緒に入つて来た金髪の少女が、「いーっ」と舌を出した。

「そんなはずない！ 僕、頑張ってるもんな？！」

同意を求めるように、一同を見渡すと、何故か誰も目を合わせてくれなかつた。

「ほーら、見なさい」

勝ち気な顔に勝ち誇った表情を浮かべて、リーヴィが高らかに笑つた。

「お前なー、ついこの前、助けられたくせに、よく言ひよー！」

「あら、そんなことあつたかしら」

「お、お前つてば、可愛くねえー！」

「な、何よ！ ベ、別に、助けてなんて頼んでないもの！」

「あつ、今言つた！ 今、助けられたって認めたよな？！」

延々続きそうな掛け合いに、皆が生温かい微苦笑を送つた。

「おー一人とも…」

こんな日くらいは素直になつて欲しいものだ、と思つたが、口には出さない彩糸だった。

「大体、あんたはねえ…つて、ちょっと邪羅ー、ちゃんと聞きなさ

「いよ！」

「あ、ーつーー！」

リーヴィが何か言いかける言葉を遮って、邪羅が大声を上げた。

「姉ちゃん…。それ…」

震える指先が、ラエスリーの手に握られた……を見つめていた。

「え？」

言われて、ラエスリーは視線を自分の手元に落とす。

それから、ハツとなつたように、包装紙に付けられたカードを見た。

「姉ちゃん…。それ、俺宛ての分…」

「邪羅、す、すまない…」

「貴重な一個だつたのに…」

呆然となる邪羅と、申し訳なさそうに小さくなるラエスリー。

彩糸がそつとリーヴィに近づき、耳打ちした。

「今ですよ、リーヴィ」

「えつ？」

「今がベストタイミングだと呟つてるんです」

「ええーっ、ちよつ、そんなの急に…」

「今を逃すと、渡しそびれますよ」

「だつて…やだつ、たつた今喧嘩してたのよ？ 何て言えば…」

「自分の気持ちを素直に言えばいいんですよ？」

ついつと背中を押されて、リーヴィは邪羅の真ん前に出た。

「あ、あのっ。邪羅っ！」

声が裏返つていた。

「何？」

藤色の若者の目は、ビヨーンと落ち込んでいた。

「こ、これっ！」

真っ赤になつて差し出す手には、薄紫の可愛い箱が握られていた。

少々いびつに結ばれたりボンが、作り主の精一杯の思いを伝えてい

た。

「青春ですねえ」「
のほほんとした声がした。

いつの間にか現れた万年青年セスランが、紅茶を片手に……の一粒
を口に放り込む所だった。

「あの……それは、邪羅の分で……」

ラエスリールが困ったように言つと、澄ました顔で返事を返す。

「形ある物はいつかは壊れます。形ある……は、誰かの胃袋に納ま
らなくてはなりません」

「……」

「まあ、本人がもう気にしてないみたいですし、いいんじやないで
しょうか」

皆の視線に飄々と答える、その先を見れば、ツンデレを絵に描いた
ような青春真っ最中の若い一人の姿があつた。
…放つといひや。

はあ……。

ラエスリールは、今日、何度田かのため息をついた。

「そう言えれば、肝心の極悪大魔神はどうしたんです?姿が見えませ
んが……」

「ああ、ついさっきまで居たんだが……。また野暮用とか言つて雲隠
れだ。まだ半分しか食べてないのに……」

「えつ? !

「まだ半分?」

「この量の? !」

皆が口々に驚きの声を上げた。

「いや、この量の半分じゃなくて、食べて残った分がこの量なわけ

で…

ラエスリールが説明する。

「どっちにしても、すごい量じゃない？」

「よく食べれましたね…」

「胃袋が別の空間につながってるんじゃないの？」

「さすがは性悪大魔神ですね」

その場に居ない者にとっては、何とでも言つていいらしく。

「あ、あの、それって変なのか？ 涼しい顔して食べていたから…」

皆の異常な反応に、ラエスリールが少し焦つたように言つた。

「ま、まあ、心配要らないんじゃない？ あの御方のことだから…。

それより、まあ、食べるわよ～」

「う…」

年に一度の乙女のビッグイベント。

うずたかく積まれたチョコレートの山を前に、ラエスリールの苦闘はまだまだ終わりそうになかった…。

(後書き)

邪羅がリーヴィを助けたと言っているのは、原作版の『鏡の森』のことです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0643k/>

今年もその日がやって来た！

2010年10月21日21時48分発行